

## 中国の養蜂と 第33回国際養蜂会議

松香 光夫・竹内 一男・  
榎本 ひとみ

1993年9月21日から26日まで、標記の会議が開催され、私たちは玉川大学ミツバチ科学研究所およびアジア養蜂研究協会の立場で参加できたので、その見聞を紹介したい。10余年前にみた中国とは随分と変化が大きく、21世紀にはGNPが世界一になると豪語する国の姿が目に見える状況であったことが印象深かったが、その感想はさておいて、ここでは4部をわけて報告する。

はじめに受付時に渡された要旨集に載っていた「中国の養蜂」に基づいて、その全容を紹介することとしたい。続いて大会の様子、アピエクスポに展示されていた書籍雑誌などの資料、雲南省昆明の農業大学訪問の記録である。

### 中国の養蜂

古代より文明の栄えた中国では、養蜂も3千年以上の歴史を持つが、ミツバチが貯める甘い蜜の存在に気づいて、それを採集すること、あるいはほかのミツバチ生産物を利用することは、ミツバチの飼養よりかなり先だて行われていた。やがて養蜂は野生群を捕えて飼養へと発展し、各時代の人々によって研究と改良が重ねられて、近年におけるセイヨウミツバチと可動巣枠式巣箱の導入を経て、現在では専門的な商業ベースの産業へと成長してきた。養蜂、ミツバチ科学に関する研究、教育機関は充実しており、進んだ生産物の処理方法により国内、国外間の流通も盛んである。

中国の自然科学史をひもとくと、紀元前16～11世紀の殷商時代の甲骨文字の文中に「蜜」の字が初めて現れている。ミツバチの生態、生物の観察記録、ミツバチ生産物の効能について

の著述は古い文献中に数多く見いだされ、紀元前1～2世紀の「神農本草経」では“ハチミツは美味で、毒はなく、体によい。痛みをやわらげ、喉の渇きをいやし、飲み続ければ不老の効果もある”と書かれている。明代の著名な医薬学者、李時珍(1518～1593)はその著書「本草綱目」のなかで、ハチミツの品質、生産管理法などを詳細に述べており、蜂児、蜂の巣、花粉についても言及している。1904年発行の「Orient Journal」誌には、ミツバチ生産物の医学的、薬学的効能についての紹介記事が掲載されたが、このミツバチ生産物による近代的な療方法は、それまでの長い伝統に基づいたものであった。

1980年代にはいと人々の生活レベルの向上と共に、ミツバチ生産物を製品化する企業が中国各地で盛んに設立されるようになった。天然の健康食品への需要に応じて、ハチミツ、ローヤルゼリー、花粉、プロポリス、蜂毒、蜂児等のミツバチ生産物を含む多くの医薬品、栄養ドリンク剤、健康食品、化粧品が伝統の知識と新しい技術を用いて開発された。これらの製品は国内で消費されるだけでなく、海外にも輸出され、歓迎されている。世界のトップレベルである中国の蜂針療法は、これまでに多くの病気の治療に成果をあげている。わが国は今後も世界のミツバチ生産物市場の発展に寄与し、人々の健康増進に貢献したいと念願している。

アジア大陸東南部に位置する中国はその広大な国土に多様な気候区域、豊富な天然資源がある。北部地方は夏季も冷涼だが、一方南部には一年中春の気候が続く地域もある。1911年のセイヨウミツバチ(イタリアン種)と可動巣枠式巣箱の導入を契機に、中国の養蜂は伝統的な方法から近代的なものへとその姿を大きく変えてきた。特に1950年代には政府の援助を受け、戦時の混乱による停滞から抜け出し、急速に整備が進み、大きく発展した。現在中国全土で25万人の養蜂家が769万群を飼養している。年間ハチミツ生産量は20万トン、ローヤルゼリーの生産量は世界一で、その輸出量は世界の市場の80%を占めている。需要に応じて蜂毒、蜂児の生産を増やすことも可能である。

現在飼養されている主な種はセイヨウミツバチ（イタリアン種）であるが、カーニオラン種、コーカシアン種なども近年導入されている。標準的な10枚巣箱で長距離の移動をする養蜂も盛んであるが、近距離の移動を含む定飼養蜂も行われている。一群当りのハチミツ生産量は年間平均40kg、中には150kgを生産する群もある。ロイヤルゼリー生産量は平均1~2kg、特に優秀な系統では収量4kgにもなる。トウヨウミツバチ250万群の多くは既に可動巣枠式巣箱で飼養されているが、一部は現在も伝統的なたて型の丸太巣箱に飼われている。南西辺境地方にはオオミツバチ、ヒマラヤオオミツバチ、コミツバチ、クロコミツバチが分布している。

変化に富む広大な国土と豊富な植物相を反映して、中国では一年中どこかで養蜂植物が開花し、流蜜時期を迎えている。市販されるハチミツの主な蜜源植物としては：レイシ、リュウガン、カンキツ類、レンゲ、ナタネ、ニセアカシア、ナツメ、ナンキンハゼ、クリ、ユーカリ、クローバー、シナノキ、ゴマ、ヒマワリ、ソバ、ヒサカキなどがある。そのほかにも果樹、野菜類、特別の薬効が認めらる花蜜の植物などがあり、これら天然の豊かな養蜂植物源が中国における養蜂の発展の確かな基礎となっている。

養蜂業界をまとめる組織は国の中央から各地方のレベルまで整えられており、政府による適切な規制や立法措置がとられている。例をあげると、野生のミツバチ資源の保護、ミツバチの

病気の対策の強化、優良系統の選抜、ミツバチ生産物を利用した製品の品質管理向上のためのガイドラインの設定などである。

中国農業科学院蜜蜂研究所をはじめとし、ミツバチ科学、養蜂学、ミツバチ生産物の研究機関も各地につくられ、ミツバチの育種、飼養管理技術、生産物処理工具、病気や寄生ダニの診断と対策、生産物の食品化学的分析と多様な利用方法の開発、蜂針療法、ミツバチ資源の調査等多方面で実績をあげている。これらの成果はすぐに公開され現場にとり入れられている。中国の養蜂関係の教育機関としては福建農学院蜂学系、雲南農業大学蜜蜂研究室、他の農業大学や高等学校にも養蜂研修コースがあり、多くの養蜂家を育成している。

中国養蜂学会、中国蜂産品協会、全国中蜂協作委員会は学術的な、分野別の部門をもつ専門的な学会である。これらの下部組織として各地に省や市の単位で協会がつくられている。このようにしっかりした系統的な組織を持ち、急速に発展をつづけている。

第33回国際養蜂会議が1993年9月に北京で開催されるにあたって、アピモンディアの指導の元、中国の養蜂家と関係政府機関は総力を挙げて準備を進めてきたのである。

## 会議の様子

今回の会場となった国際会議場は現代中国を象徴する一つで、昨年の国際昆虫学会議も行なわれ、北京の中心から数キロ離れたこの地域は



図1 大会記念に発行された切手

中国でのオリンピック開催が決定した時に中心になるはずであった。この建物には主に二階以上に大小の会議場があり、一階のロビーが広く、そこがアピエクスポの会場となった。2階大会議場で行なわれた開会式は壇上中央にアピモンディア運営関係者が、その後ろに各国代表が並び、歓迎の挨拶、開催までのこの4年間の経過、開催国の養蜂の紹介など過去の大会と同様の形式であったが、違った感じを受けたのは予定の時間通りに進行しようとする意図が強く感じられた。アピエクスポ開場のテープカットも開会式の壇上で行ない、予定通り11時30分にはすべてのセレモニーは終了した。参加者には頭の黒い人が多くて東洋で行なわれていることを実感すると共に、アメリカ人の参加が少ないことにも気がついた。日本からはいくつかのグループで参加しておられ合計人数は110人前後になったのではないだろうか。

会議のスケジュールは表1のようであった。発表形式は講演要旨を含むプログラムであらかじめ決められている通りプレナリーセッション（一般講演）、ラウンドテーブル（円卓会議）、ポスターセッションに分かれていた。

日本からの発表はミツバチ病理学の一般講演で渡辺英男氏の「チョーク病とダニ感染に対するアオモリヒバ油の効果」、同じ病理学の円卓会議で竹内の「ニホンミツバチ群での *Varroa* の寄生消滅」、ミツバチ生物学の円卓会議で酒井哲夫先生による「セイヨウミツバチとニホンミツバチの混合群における行動の種間比較」、同じ部門で「トウヨウミツバチ群の被誘引逃去」を松香が発表することになっていたが間に合わなかったために共同研究者のタイ・チュラロンコーン大学の Wongsiri 教授が発表した。アピ(株)鷺野憲之氏の発表はポスターで行われた。

一般講演は600人収容の中会場で、ほぼプログラムの順番で次々と発表し、質問の時間は設けなかった。それでもあるセッションでは予定時間内に終らず1時間程度も超過するところもあった。またあるセッションでは座長が発表時間10分を厳しく守らせ、講演中でも時間がきたら終わらせる場面もあった。中国人のなか

にはスライドもOHPもなくただ喋るだけの発表者や、写し出された英文字が裏返しであっても、また話の内容が次のシートになっただけでもそのまま話している人もあったりで、進行や運営のご苦労が思いやられた。同時通訳のイヤホンからはインタプリターの私語が聞こえてきたり、突然話が止まったりで聞きづらかった。

円卓会議は小人数(120人)の部屋で行われ、各セッションの責任者(座長)が進行の都合のよいように発表順番を変えて前日、あるいは当日朝に掲示板に張り出した予定に従って進行した。発表時間が一人15分で質疑応答も行なわれ充実していた。

ポスターセッションは二階ロビーが会場で約50人位が掲示できるようになっていて2交替程度であった。発表内容のなかには興味を引く発表もあったが、見ている人も少なく、発表責任者がそこで来る人を待って説明することもなく掲示したままであった。

アジアでの開催ということもありトウヨウミツバチに関する発表も比較的多くあった。またミツバチ治療の部門でも中国での経験的な発表が多かったが、スライドがなかったり、発表

表1 第33回国際養蜂会議日程

21 日	午前	開会式	
	午後	養蜂経済	一般講演
	夕刻	歓迎レセプション	
22 日	午前	養蜂経済	円卓会議
		ミツバチ生物学	一般講演
	午後	養蜂植物と花粉媒介	一般講演
		ミツバチ生物学	円卓会議
	夕刻	アピモンディア総会	
23 日	技術研修(エクスカージョン)		
	養蜂生産物技術研究所, 香山植物園, 農業科学院蜜蜂研究所, 医科大学薬用植物園		
24 日	午前	ミツバチ病理学	一般講演
		養蜂植物と花粉媒介	円卓会議
	午後	発展途上国養蜂	一般講演
		ミツバチ病理学	円卓会議
	夜	芸術演技公演	
25 日	午前	養蜂技術と器材	一般講演
	午後	養蜂技術	一般講演
26 日	午前	ミツバチ治療学	一般講演
	午後	アピモンディア第2回総会	
		閉会式	

内容に具体性や正確さに欠けていたりでどこまで本当なのかと思われるものも見受けられた。

アピエクスポの会場は約 80 店舗が並び会議期間最後まで最も賑わっていた。蜜源植物の写真を展示し、中国の蜜・花粉源植物を 700 ページに及ぶ本にまとめた徐万林先生の労作に感心するブースもあった。しかし多くのブースは中国各省の農業科学院や大都市の農業関連部署による養蜂紹介、養蜂会社からの出店がほとんどであった。各ブースとも壁に蜜源植物やそれが咲く景色か蜂場の写真を貼り、他と異なるラベルに貼り変えただけに見える様なミツバチ生産品および 1, 2 種のミツバチ生産物の加工品を並べていて、変わり映えしなかった。陳列してあるハチミツは水分が多く、夾雑物がみられるものが多くて、日本で見る中国ハチミツのイメージとは随分隔たりがあった。他のハチミツ生産大国は巣箱が 2, 3 段あるいはそれ以上に重なっているが、展示されている蜂場の写真からはそのような光景は見られず、何度か質問してみたが要領を得なかった。外国からはアピモンディア本部、日本からの 2 社、ヨーロッパのダニ剤の会社程度で少なかった。

テクニカルツアーは開催 3 日目に行なわれ、会場の前に並べられた約 20 台のバスに案内もなく乗り込むと、それらが 3 グループに別れそれぞれパトカーの先導で出発した。決して早く走るわけではなく、恐らく最近の北京の交通渋滞を考えてのことだったのに違いない。訪問先はまず北京南方の蜂産品技術研究所でここではハチミツやローヤルゼリーの品質検査に始まり、いくつかの加工品の製造も行なわれているようであった。廊下から見ただけで部屋の中までは入れなかったが、化学分析室やガスクロ、コンピュータの部屋の機器は使い込んでいるようには見受けられなかった。次いで西方の香山植物園の広い草地で昼食後、隣接している農業科学院蜜蜂研究所まで歩いて見学に行く。野外に設けられた網室内で、ローヤルゼリー採乳のデモンストレーションが行なわれており、隔王板に竹ひごが使われていて中国らしかった。この研究所は飼養技術研究室（含む生物学・生理

学）のほか育種、病理、蜜源植物、蜂産品、養蜂振興の 6 部門に別れて研究が行なわれているとのことであった。

次の北京医科大学薬用植物園は広い所に様々な薬草が多量に栽培されており、新しい高層ビルができていて、薬草を中心に研究する学科ができるとのことであった。薬草園の中にある工場ではハチミツと薬草の薬効成分に抽出液を合わせたドリンク剤をお土産に頂いた。会期中にブースや見学ツアーで見かけたハチミツ関係の加工品だけでも次のようなものがあった：

ハチミツ、王乳・朝鮮人参入り内服液、ハチミツ・薬草成分入り内服液、ハチミツビール、ハチミツ・サンザシ混合ジュース、ハチミツ・薬草成分入りワイン、ハチミツ・米酢、ハチミツ・プロポリス・花粉混合液（健康、美肌、アレルギー用）。

これらの生産物は、中国の養蜂および養蜂物利用の歴史の長さを感じさせると共に、蜂産加工品の研究にいかに熱心に取り組んでいるかを示している。

### 書籍雑誌類

今回の大会に向けて準備された大部の書籍類や、従来の出版物が、農業出版のほか各省などから出版され、展示されていた。入手したものはこれまでとは異なってアート紙印刷のものも多く、カラー印刷にもなって、美しいものも多い。関心をお持ちの方はミツバチ科学研究所まで照会願いたい。なお、中国の簡体漢字の大部分は日本式のものに置き換えてある。

中国農業百科全書編集委員会養蜂巻編集委員会。1993。中国農業百科全書・養蜂巻。農業出版社。北京。pp. 396。一同百科全集は 10 年以上にわたって出版が続いているが、この機会に養蜂巻が出版された。小項目で説明がなされており、日本に関する項目も、日本の養蜂業、玉川大学ミツバチ科学研究所、岡田一次、など多数が掲載されている。

陳 耀春編。1993。中国蜂業。農業出版社。北京。pp. 271。一上編では中国養蜂の概況が簡潔明解に述べられており、下編では各省の現

況が紹介されている。本文中の写真はフルカラーで力作といえる。

中国養蜂学会ほか。1993. 中国蜜粉源植物及其利用. 農業出版社. 北京. pp. 564. 蜜源植物84種を解説し、各省毎にその流蜜状況がまとめられている。

徐 万林。1993. 中国蜜粉源植物. 黒龍江科学技術出版社. ハルビン. 本文 pp. 553, 図版 pp. 145. 当代科技重要著作・農業領域の1巻としてまとめられた力作で、主要蜜源44種、花粉源24種、補助蜜源468種と有毒蜜源9種について、繊細な線画を加えて解説している。図版はカラーのものと花粉の走査型電子顕微鏡写真とで構成されている。

中国養蜂学会編。1993. 蜜蜂飼養技術及装置論文集. 農業出版社. 北京. pp. 266. 飼養技術15編、生産技術33編、器具関係10編の論文が英文要旨つきでまとめられている。現在の中国の技術レベルを知るに良いてがかりである。

IBRA 編。1993. 六種文字養蜂詞典(養蜂用語辞典 第5巻). 中国養蜂学会. 北京. pp. 204. 会議に向けて発行されたもの。IBRAからの連絡はしていないようで、IBRAからは別途に中国語、ヒンドゥー語を含んだ辞典が出版されている。

喬 延昆編。1991. 中国蜂産品行業名録. 中国蜂産品協会. 北京. pp. 71. 中英語による住所録. 電話・FAX 番号つき。

徐 景緻, 庄 元忠編。1991. 蜜蜂花粉研究与利用. 中国医葯科技出版社. 北京. pp. 245.

陳 世璧。1989. 人工育王(養蜂選書). 農業出版社. 北京. pp. 94.

梁 詩魁, 任 再金。1993. 蜜源植物要覽(養蜂選書). 農業出版社. 北京. pp. 133. 養蜂選書は既に15冊が発行されているシリーズ。

楊 淑芬, 勞先潔編。1989. 中国蜂産品文摘(1979~88). 中国蜂産品協会. 北京. pp. 303. 約600編の中国文献要旨を収録。

楊 淑芬編。1991. 国外蜂産品文摘(1979~88). 中国蜂産品協会. 北京. pp. 497. IBRAのApicul. Abstr. から約600編を収録したもの。雲南省養蜂協公室編著。1980. 雲南蜜源植

(Lour.) Rae.  
(椴科, 椴樹属).  
互生, 小叶9~  
15, 花白色, 核果



川、贵州和台湾  
越南、老挝、柬  
的环境, 常栽植  
5月中旬至6  
月可取蜜5~  
10中上蜜。  
和西南各省区。  
(任再金)

岡田一次 (Okada, Ichiji, 1909~ )

日本現代蜂学家、农业昆虫学家。1909年9月17日



生于日本兵库县。1934年毕业于北海道大学理学院动物学系, 留校任农学院昆虫教研室助教。1939年在中国, 任伪满洲公主岭农事试验场昆虫科技佐。他曾对日本、朝鲜、中国(东北和台湾)等地的昆虫作过较深入的研究, 1948年获农学博士学位。1949年任东京都玉川大学农学院教授, 致力蜜

蜂科学研究, 对本科生、函授生开蜜蜂专业课。1972年任玉川大学农学院院长, 1977年开始招收蜂学硕士生。1979年日本玉川大学蜜蜂科学研究所成立, 冈田一次为主任教授, 招收博士研究生, 主编出版《蜜蜂科学》季刊。1982年11月3日, 日本政府授予三等瑞宝勋章, 以表彰他长期从事教学和蜜蜂科学研究的成绩。1985年退休为玉川大学名誉教授。他为开创日本蜜蜂专业和科学研究贡献卓著, 人们赋予“蜜蜂博士”爱称。

他热心蜂学国际交流活动。1965年曾出席在罗马尼亚布加勒斯特召开的第20届国际养蜂会议, 并作大会报告。1972~1979年, 冈田一次任国际蜜蜂研究会(IBRA)理事。从1981年9月起, IBRA东亚图书分部设在日本玉川大学蜜蜂科学研究所。1985年在日本名古屋召开的第30届国际养蜂会议, 冈田一次为组织委员会总干事。

1950~1991年发表有关西方蜜蜂生态、蜂蜜、王浆、蜂毒、雄蜂蛹、授粉等论文约80篇, 有关日本蜜蜂论文约30篇。著作有《蜜蜂》(玉川百科, 与酒井哲夫合著)、《昆虫》(玉川新百科)、《蜜蜂的科学》(玉川选书)、《蜜蜂》(科学大图鉴)、《畜产昆虫学: 蜜蜂》(与坂本与市合著)、《蜜蜂记》和《日本蜜蜂志》等。

(房 柱)

図2 中国農業百科全集・養蜂巻より

物. 雲南人民出版社. 昆明. pp. 171.

匡 邦郁, 匡 海鷗編。1992. 雲南養蜂学・雲南省農村致富技術函授大学. pp. 284.

匡 邦郁, 易 嘉賓, 彭 和録, 匡 海鷗編。1991. 中蜂活框飼養技術. 雲南科技出版社. 昆明. pp. 118.

中国農業科学院養蜂研究所編著。1986. 西北蜜源植物及其利用. 寧夏人民出版社. 銀川. pp. 330.

中国西安花粉研究所。1992. 花粉と人類健康—全国第2回花粉学術研討会論文集. pp. 183.

高 運后。1993. 蜂産品経営と養蜂効益評價. 中国人民大学出版社. 北京. pp. 106.

陳 世璧, 袁 澤良編著。1988. 蜜蜂産品保鮮, 加工利用. 科学普及出版社. 北京. pp. 192.

Shi Bolun & Wang Chongxi 著, Chen Junying 訳。1992. New Factors Contributing to Human Longevity—Royal Jelly, Pollen and Honey. 農業出版社. 北京. pp. 96.

中国農業科学院養蜂研究所編著。1993. Honeybee, Royal Jelly, Environment. 中国科学普及出版社. 北京. (英文)

## 雑誌

『中国養蜂』 創刊 1934 年. 中国農業科学院蜜蜂研究所主編. 隔月刊. 権威のある代表的な刊行物. 発行部数も最大である.

『蜜蜂雑誌』 創刊 1981 年. 雲南省農業科学院編. 月刊. 省内に止まらない一般誌で, 2 万部を発行, 編集者は養蜂家は 20 万いるので, もっと増やしたいと張り切っていた (後述).

『湖北養蜂』 創刊 1975 年. 湖北省畜牧局主編. 季刊.

『養蜂科技』 創刊 1982 年. 江西省養蜂研究所主編. 季刊.

## 雲南のミツバチ

大会後の雲南行きは, 1992 年に北京で開催された国際昆虫学会議の折りに, 玉川大学佐々木正己教授らが果たせなかったこともあり, 今回は早くから旅行社も通じて手配をしていた. これまでの訪中ではセイヨウミツバチによる養蜂を見ることはできたが, 数百万群というトウヨウミツバチによる養蜂の様子をぜひ見たいという希望があったからである. 四川省と雲南省とがトウヨウミツバチの本場であるが, 旅程を考えて昆明ゆきを加えることにした.

訪問先は 2 か所. 雲南農業大学と同省農業科学院である. 大会のアピエクスポにはどちらの展示もあり, その責任者として前もって連絡してあった大学の匡副教授, 科学院の「蜜蜂雑誌」甘編集長にお会いして, 訪問を確認できたのは安心であった.

さて 9 月 30 日は朝から大学を訪ねた. 建物の入口には「東方蜜蜂研究所」と看板があった. 東方蜜蜂とはトウヨウミツバチのことであるから, それ専門の研究所というわけで世界に類をみないものと敬服した. 同大学は 2 年制の養蜂学部をもち, 教職員 12 名, 学生 30 名とのことである. 関連科目 8 科目 (ミツバチ生物学, 生態学, 花粉媒介, 遺伝育種学, 飼育管理, 養蜂生産物, 養蜂植物学, 養蜂経済学) が開講され, 3 か月の宿泊実習が含まれているという.

応接室での挨拶の交換は中国式に雲南大学からの研究者などを含めた関係者一同が集い, 事

情の説明や, ビデオを見せていただいて, 概要がわかったような気になった. 中国のトウヨウミツバチは約 300 万群, そのうち 100 万群が雲南におり, 越冬のためにセイヨウミツバチが一時的に滞在する他は, トウヨウミツバチによる養蜂を行っている. 大学の活動の結果, 放任飼養をしていた頃は群当たりのハチミツ生産は 1kg 程度であったものが, 現在では 20kg にも達しているとのことである. ただし, 目下は周辺地区に移動しているということで, 現場を見ることはできなかった. 実情については長期滞在をしないとわからないという感じを受けた.

雲南は大きい省で, アジアに住むミツバチの 1 種を除く全てを観察できる自然にも恵まれている. アジア養蜂研究協会の大会をぜひこちらで開いていただいて, その際にはそれらのミツバチを観察できるツアーを組んでほしいものとお願ひし, 今からその実現が楽しみである.

その後, 学内蜂場のミツバチを使わせていただいて, 念願の実験を行った. これは, 玉川大学で抽出したトウヨウミツバチを引き寄せる東洋蘭のエッセンスを持って行って, 本場の? ミツバチの反応をみようという計画であった. 因みに東洋蘭の本場は雲南であるから, 特に興味をもっていたのである. 残念ながら, この実験は失敗に終わったが, 抽出物は大変に微妙なものなので, 再度試みたいと思っている.

この実験などで時間がかかり, 次の訪問地である農業科学院に着いたのは, 予定よりも 2 時間も遅れてしまった. 科学院そのものはかなり大きく, 例えば植物学研究所では多くの遺伝資源を収集している特色を持った科学院である. その一部に「蜜蜂雑誌」という発行部数 2 万部という雑誌の発行所があり, 私たちの「ミツバチ科学」誌と交換をしているので, よしみがあつたのである. 応接室には共産党情報研究室長をはじめ, 300km 南方のミツバチ研究施設や蜂場からも, 合わせて 10 名ほどの関係者に歓迎を受けて恐縮した. 目下借り住まいということであったが, 今後の発展を祈り, ますますの交流を約して, 帰路についた.

(〒194 町田市玉川学園 6-1-1 玉川大学)